

栗ガ丘小学校は完全統合五十周年となりました。「完全統合」という表現が使われる理由について記念誌等からその歴史をたどってみました。

小布施町、都住村が昭和二十九年に合併して以来、小布施町には、小布施小学校、都住小学校の二校が存続していましたが、両校の老朽が目立ち改革の必要があるということから、両校統合という意見が昭和三十九年の町教育懇談会で出されました。翌四十年には小学校統合調査特別委員会が設置され、統合に向けて検討が始まりました。その後、設置位置の選定、公募による校名の決定を経て、昭和四十五（一九七〇）年三月をもって小布施・都住両小学校は廃止となり、同年四月に栗ガ丘小学校発足となりました。この時点で小布施・都住両小学校は栗ガ丘小学校の部校となり、両校で教育活動を行いながら運動会などの行事を合同で実施しました。そして



このように、五十周年を迎えた完全統合は、本来ならば地域の方とともに



盛大にお祝いしたいところですが、難しい状況にあります。児童から募集したデザインをもとに作成した五十周年をアピールする横断幕を正面玄関に設置したり、運動会では全校ダンス「弾き舞」の黒Tシャツを新調し披露したりしながら、地域の皆様にもこの節目を迎える気持ちを共有していただいているところであります。全校児童で人文字写真も撮り、五十周年に向けて気持ちを盛り上げてきています。十一月には記念式典を行い、全校児童で五十周年を祝いました。児童が五十周年の節目に在学していたことに誇りをもつとともに、次の十年、さらには百周年へと続く母校のこれまでの歴史を支える一員となっていく決意が心の中に育つことを期待しています。（日台邦治）

栗ガ丘小学校総合50周年

栗ガ丘小学校



第237号

発行所 上高井教育会
発行人 上高井教育会理事長 岡田 憲和
編集人 会報編集委員 長一 川本 修
印刷所 須坂新聞社

口が増加し、児童数増加を見込んで昭和五十年には六教室の増築工事が行われました。児童数は昭和五十八年のピーク時に一二四一名に達しました。その後は、少しずつ減少してきて、ここ数年は六百名前後で推移しています。

小布施町民の期待を一身に受けて誕生した栗ガ丘小学校は地域と

の結びつきをととても大切に行っています。本年度も六年生が「巴錦保存会」の皆さんにご指導をいただきながら北斎巴錦（大菊）の栽培を行い、一人一鉢ずつ菊花展への出品をしました。また、四年生・五年生が「まちづくり委員会環境を考える部会」の皆さんに教えていただきながら小布施丸なす作りや落ち葉から堆肥を作ること



火ばら談義

「ここには書き切れない「標高」の話をしたい」

関 和之

某テレビ番組で「標高に詳しい長野県民」をやっていた。県民は自宅の標高を言えるという（私の自宅は約三百八十m）。「お菓子やパンの袋が膨れる、理科の実験で水の沸点が百度に達しない」なども紹介されていた。上高井で一番標高の高い豊丘小（約六百m）でも沸点は九十八度程度。「パンの袋パンパン」も含めて日常生活

上はあまり実感ないだろう。私が住んでいた菅平の住宅（約千二百六十m）では未開封のカップ麺がパンパンになった。

私はずっと気圧高度計つきの腕時計を代替わりしながら使ってきた。「気圧センサーだから常に数値が変わって使い物にならない」という口コミも見られたが、それは使い方の問題。気圧変化による補正をして使う。飛行機の高度計も基本は気圧高度計を使用している。実は気温による補正も必要で、ざっくり言うとお米登る毎に夏場は五m足し冬場は四m引く。理由は省略。

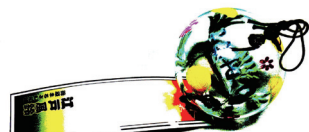
標高を知ったところで何の役に立つか。五年生の登山では下見でも本番の引率でも直接役に立った。児童の実態をもとに休憩を取るとき、標高と地形図から位置を把握できるため、無駄な休憩やペース配分を誤ることはなかった。（今はスマホの併用で精度も上がる。諸注意は必要だが）

修学旅行（東京）では山の民がほぼ標高ゼロmのところに行く。仁礼小（約五百七十六m）にいたときは「校庭からスカイツリーの頭が突き出るくらい」で仁礼の標高を感じ取った。現地で見上げたときに「あの辺に学校がある」と想像した（当日は雲の中だった）。ちなみに東京タワーとほぼ同じ高さが豊洲小。

海で育つ子どもたちが海を理解し共存している「海の民」であるように、山で育つ子どもたちも山を理解し、山と共に生き、将来県

「もう少し」

鳥居明日香



カット 永藤章雄／小山小

外に出たときに「山の民」として胸を張れたらいいと思う。ある学校で登山したとき、生徒が「（人生で）初めての高さだ！」と感激していた。簡単に疑似体験できる時代だけれど、実際に現地で感じることも大切にしたい。皆さんもちょっと標高を気にしてみませんか。（森上小）

はないかと考えています。国語に限らず、私は子どもたちの会話を聞いていることが好きです。とは言いつつも、時間の関係で早く決めてほしいなと思ったり、もっとこうしたらいいんじゃないかと思ったりして、口を挟んでしまうこともあります。もちろん、話し合いの内容を修正すべきタイミングはあると思いますが、もしかしたら、私が言わなくても「もう少し」待てば、他の子が言ったかもしれません。

こんな会話を聞かなくていいか、名前を書こう」「直さない人には、宿題を増やそう」「え、それやだな」「でもさ、ちゃんとやればいいんだから」

「〇〇しなかったら、〇〇」という罰の発想。必要な場合もあるとは思いますが、できれば、殺伐とした雰囲気になつたりしてしまわないかなと思います。この会話を聞きながら、いろいろな発想が出てくるような経験や活動を増



きながら、いろいろな発想が出てくるような経験や活動を増

編集後記

やしていこう！と思いました。結局「宿題増やしたら、ふざけるのはやめるのかな？」と思わず口を挟んでしまいました。でも罰的な発想であれ、やってみなければ分からないこともあります。うまくいかなければ見直し、変えていく。その過程も大切なのだと思います。そして、それも大切な経験なのではないでしょうか。

心と時間の余裕を持って、「もう少し」をちょっとずつ延ばし、変化していく過程も含め、大切にしていきたいなと思います。（旭ヶ丘小）

令和四年度会報二二七号を発行し、無事にお届けすることができました。

今号は、創立記念を迎えた学校の様子や、コロナ禍で工夫を取り組んだ行事を中心に取り上げました。コロナ禍のため、各校の様子を情報交換する機会を設けることができなかったため、会報を通して参考にしていただけたらと思います。また、文面から活動の様子や、子どもたちの生き生きとした表情、そして充実した時間などが伝わったのではないでしょう

紙面作成にあたり、お忙しい中、ご協力をいただいた皆様には、心より感謝申し上げます。これからも、会員の皆様に手に取っていただけるような会報を作成してまいります。今後ともご協力をお願い申し上げます。（安藤）

教育会だより

- 7・15 第2回研究委員長会
中心講師のご指導・ご講演
講師 畔上一康 先生(信州大学学術研究院・教育学系教授)
演題『学びにおける主体性と対話』(各委員会の研究にかかわって)
研究企画委員会
教研推進委員会◎
- 29 教育会夏期講演会 講師 油井亀美也 先生(JAXA宇宙飛行士)
演題『宇宙で気付いた大切な事』
会員発表 発表者 山田 香 先生(須坂市立豊洲小学校)
演題『自律して学べる子を目指して自由進度学習による授業改善』
- 8・2～3 同好会夏期講座・同好会④(各会毎独自に開催)
- 8・18～19 日本連合教育会研究大会東京大会(オンライン開催)
26 上高井教育7団体代表者会(書面にて)
30 第4回研究推進委員会(兼 信州教師塾B)
- 9・2 第5回同好会
3 上高井教育研究集会(レポート配付で集会に換える)
7 第4回理事会
20 上高井教育7団体要望団 県教育委員会へ要望書提出
- 29 第5回研究推進委員会
10・3 信州教師塾B『作文力研修』
講師 佐藤秋彦 氏(信濃毎日新聞読者センター長)
11 第6回同好会
13 第6回研究推進委員会
15～16 郡科学作品展
22～23 あゆみ展・郡市展覧会(シルキーホール)
27 第7回研究推進委員会
- 11・1 第5回理事会・令和4年度教育会中間会計監査
4 第7回同好会
8 上高井教育会公開授業研究会
中心講師 畔上一康 先生
国語(森上小)、社会(東中)、算数・数学(常盤中)、理科(常盤中)、生活・総合的な学習(小布施中)、音楽(高山中)、図工・美術(小布施中)、体育・保健体育(相森中)、家庭・技術家庭(東中)、外国語活動・英語(常盤中)、道德・特別活動(栗ガ丘小)、特別支援教育(小山小)、健康教育(教育会館)
- 14 第2回教研三団体代表者会
17 第4回教育会総会
○令和4年度教育会中間会計監査報告
○令和5年度教育会事業計画案
- 20 信州“教育の日”青木大会
(You Tube live)
25 第8回同好会
29 第8回研究推進委員会
12・19 研究委員長会◎
21 上高井教育会報第237号発行

感謝の修学旅行

修学旅行実施に向けて、まずはコロナ禍の実践事例の情報を集め、分散登校中もリモートや共同編集機能を活用し、刻々と変化する状況に対して日々出来得る対策を検討し、準備を進めてきました。二百名近い本校の修学旅行隊が安全に行動できるように、バスの追加や宿舍の貸し切りなど、時には学

校長自ら関係機関と交渉し、何パターンものシミュレーションを行い、可否判断の明確な基準設定や感染防止対策の具体案の作成などに活かすことができました。



壱坂中学校 山崎会理

きました。

本校では特に、市中感染を避けるため、二日目の班別見学の際も宿舍で昼食をとりました。間食や食べ歩きができない中、宿の方のご厚意で食事に添えられたおみくじに、生徒は笑顔で応えていました。マスク着用、手指消毒、検温、換気、黙食、様々な制限の中で、「行けることがうれしい」「行けるだけありがたい」という生徒の言葉が胸に響きました。



学旅行では見えにくい、実施できる喜びや多くの方の支えに、気付くことができましたことです。この仲間と共に修学旅行を実施できたことに、感謝いたします。

コロナ禍の修学旅行

井上小学校 小島直人

「延期？」「〇県も増えた」当初、目的地将長野県内か北陸方面を考えていましたが、オミクロン株の流行によりどこも感染者数が多くなったことから、四月に入って東京も候補地として検討することにしました。それからというものの、コロナ関連のニュースを見ては頭を悩ませる毎日。最終的に東京に決めたのが、キャンセルぎりぎり、実施の約一ヶ月前でした。その後は、なるべく混雑する場所を避けるように交通手段や見学場所、食事場所、動線

の見直しその他、急な体調不良の児童がいた場合の対応を何パターンか考へたり、コロナ対応に特化した保険を調べて加入したりするなど、緊急事態に対する対応を考えてきました。修学旅行当日は、児童全員が参加でき、旅行中に体調不良を訴える子もおらず、笑顔いっぱい思い出に残る旅行となりました。

来年度以降も、修学旅行に限らず、様々な行事や活動で頭を悩ませることが多々あると思いますが、場所がどこ

コロナ禍の職場体験学習

高山中学校 原田奈実

「コロナ禍で職場体験学習ができるか」という不安がありました。しかし体験により獲得することが多いこの学習を、どうしても行いたいと考えました。そこで今年度は、「高山村内限定」としました。普段の生活圏内から出ないので、保護者の皆さんも安心です。心配されたことは、村内だけで二学年生徒六十名の職場を確保できるからです。生徒達が、知っている職場を地図上に書き出すと、七十ほどありました。

(実際はもっとあります)。もう一つ心配されたことは、数に限りがあるので、職種を選んでの体験は難しいことです。そこで「社会体験学習」という名前で生徒にお知らせしました。「社会で働くとはどういうことか」を体験して知るという意味です。生徒たちは二日間、自分が設定した「個人テーマ」を解決できるであろう職場で体験をしました。自分なりの結論を導き出し、体験したからこそ分かったことを聞かせてくれました。

「村内限定」により生徒たちは、地元には多くの職場があったこと等に気付き、改めて高山村を知ることにつながりました。また、地域の皆さんの温かさに触れることで、より「働く思い」への共感につながったように思います。

「今できること」を問い続ける

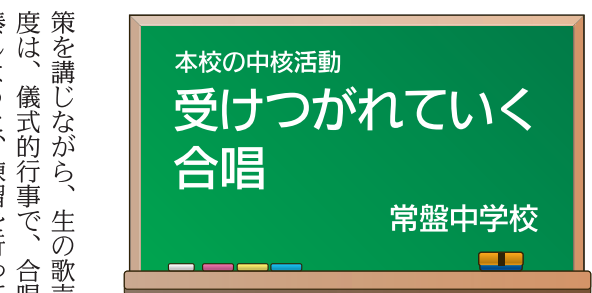
須坂小学校 平川達也

九月十八日に行われた須坂小学校・須坂支援学校による合同運動会。昨年度以上に厳しいコロナ禍に対応するため、急遽種目変更を余儀なくされました。そこでは、「連学年による活動を避け、単学年による学年種目を選定していくこと」となりました。

例年の三倍近い「採点種目」であったにも関わらず、結果はなんと赤白引き分け！驚きと喜びの入り混じった歓声が、子どもたちから上がりました。表現種目がほとんどない、例年にな



い形式での運動会。それでも、「自分から」「精一杯」活動に取り組もうとする子どもたちの姿は、良い意味で「例年通り」でした。



策を講じながら、生の歌声で演奏されました。今年度は、儀式的行事で、合唱団による校歌の合唱を演奏しようと、練習を行ってきました。しかし、一学期終業式では、感染拡大の懸念があったため、式で披露することはできませんでした。それでも、合唱団の志は高く、校歌を五番まで見事に合唱する姿は凛としており、本校の伝統を大切にしようとする頼もしい姿がありました。

本校の中核活動の一つに合唱があります。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、練習方法や発表方法を大きく変更することが必要になったものの、様々な感染対策を講じながら、本日まで伝統である合唱を受け継いできました。



また、校友会が主催する合唱活動の一つに「絆コンサート」があります。これは、異学年の二クラスがペアになって合唱を発表するコンサートで、パート練習時から、二クラスが一緒になって約三週間の練習を行います。この期間、下級生は先輩の歌声を聴きながらその美しさに触れ、本校の伝統である「真髓」を引き継ぐ心をする心を養います。そして、練習の企画・運営を通して、主体的に合唱に取り組もうとする態度を、先輩から学んでいきます。音楽会や親善音楽会等、後輩が先輩の歌声を聴き、伝統を受け継ぐ機会もたくさんありますが、絆コンサートを通して本校の合唱が受け継がれています。このように、合唱は大切な本校の中核活動の一つとなっています。

(関谷 美紀)

本校の宝 日滝小学校新・旧校歌について

本会報の依頼を受けたとき、「日滝小学校の校歌は古い校歌と、新しい今の校歌と、二つあると聞いたことがあるよ。」とある先生からお聞きした。調べてみると、今歌われている校歌は、平成二年の校舎移転改築十周年記念式典で、新校歌として発表されたものであるという。旧校歌は昭和二十八年から、平成二年まで歌われていた。どのような経緯で、新校歌が作られたかはわからないが、楽譜を見比べてみると、今の校歌は、日滝地域の特色、近くの山々の名が歌詞にあり、旋律も流れるような、盛り上がりがありやすく、子どもたちも曲が持つ勢いに乗って歌いやすそうに歌っている。新旧共通しているのは、「少年われら」という歌詞である。「たくましく、ともに生きていこう」という子どもたちへの思いが、受け継がれているように感じる。コロナ禍で歌う機会がぐっと減ってしまったが、時の節目には、歌い継いでいけるよう、全校で歌う機会を作っていきたい。



QRコードで校歌が聞けます

(田中 晴菜)